

〈「学びの共同体をはぐくむ学校図書館」を考えるミニ・シンポジウム〉

司書教諭と学校司書が共に専門職として 協働する学校図書館

佐 藤 敬 子
中津井 浩 子

I. 学校教育と図書館活動～情報活用教育とのかかわりを中心に～

1 本校概要

本校は芦屋市にある中高一貫教育の男子校である。中学は約36人×5クラス、高校は約45人×5クラスで、高3生の約7割が甲南大学へ進学する。学校図書館については、司書が複数配置され資料費も潤沢であったものの、旧館時代は非常に知的レベルの高い生徒や研究者向けの蔵書構成であった。生徒のための図書館づくりが本格的に始まったのは、阪神・淡路大震災で校舎が全半壊となり、1997年5月に現在の図書館（新館）が開館してからである。

1.1 図書館概要

図書館は中学棟・高校棟とグラウンドや食堂を結ぶ動線上に位置しており、生徒が教室移動の折に立ち寄ることのできる環境となっている。

- ・スタッフ…5名 図書館長、司書教諭、司書3（正規1、業務委託2）
- ・蔵書…約6万5千冊
- ・広さ…約700m²

2クラス＋少人数選択授業の受入が可能

- ・情報環境

インターネット端末8台、モバイルPC（授業用）35台

教育用データベース（新聞記事検索）、WebOPAC

各種視聴覚資料

＊その他の詳細については図書館 HP を参考にされたい。

甲南高等学校・中学校 HP (<http://www.konan.ed.jp/>) の「リンク」からアクセス

1.2 図書館運営委員会

校務分掌は「図書館」として独立しており、図書館運営委員（いわゆる図書係に相当）が各教科、学年、部課を網羅するように選出され、図書館長、司書教諭、司書を含めた10人程度の委員で月1回の会議を行っている。図書館運営委員の役割は下記の通りである。

- ・各教科保管雑誌、図書の管理
- ・図書通信巻頭言の執筆
- ・昼休み監督
- ・会議（月1回）

方針決定、各種報告・連絡や相談

図書見計らい、マンガ・ライトノベルの購入決定

2 本校における情報活用教育と学校図書館

総合的な学習の時間に相当する授業として、本校では中学「情報活用」と高校「E-Study」という授業を設けている。これらの授業は基本的に図書館をベースに行われ、図書館としては授業時間内外において資料・情報提供を行うことはもちろんだが、生徒の成果物や課題に関する資料・情報の展示などを通して、授業と図書館活動とをリンクさせるように心がけている。

2.1.1 中学「情報活用」

1999年度、導入当初のカリキュラムは、中1で図書館利用教育を中心に、中2で情報を取捨選択して加工・発信する過程を学び、中3でその集大成として各人で設定したテーマについて調査を行い、レポートを作成するというものであった。現在では、中3でキャリア教育を取り入れているが、図書館には生徒一人ひとりの関心に応じた資料を揃えることが要求され、資料は購入するほか、甲南大学図書館からの資料借受、公共図書館での団体貸出、相

互貸借などの制度を活用して提供した。

人的援助としては各クラスに担当司書を設定して自己紹介を行い、授業時のガイダンスや利用指導、モバイル PC 貸出、不足資料の準備など、責任をもって行うこととしている。

「情報活用」導入後、館内の環境整備も急ピッチで進んだこともあり、自力で求める資料・情報にアクセスできる生徒が増えてきた。

2.1.2 高校「E-Study」

2000年度に高2選択科目として開設された「E-Study」は、翌2001年度から高3選択科目としても設定され、2003年度には高2文Iコースで必修化された。学習内容としては基本的に「情報活用」の流れを引継ぎ、生徒各人が自由にテーマを設定してフィールドワークを取り入れた調べ学習を行い、テーマ発表会などを経てレポートを作成した後、プレゼンテーションソフトを利用して成果を発表する。1クラスにつき3名の教員が生徒のテーマに関する相談に乗り、作業の進捗状況に応じたアドバイスを行っている。

「E-Study」の効用の一つとして、図書館に足を運ぶ生徒や教員の数が増えたことによる利用増加や、多くの教員が授業支援の様子を目の当たりにすることで、教育課程の展開に寄与するという学校図書館の役割についての共通理解が得られたことが挙げられる。「E-Study」研究チームに「情報活用」を担当する司書教諭も加わったことも大きい。

2.2 教科学習と学校図書館

保健での調べ学習が2006年度より高1で、2007度からは高2でも取り入れられた。教科書で取り上げられたテーマを各グループが1つずつ担当してレジメを作成、20分間の発表を行っている。教員は発表方法や内容についてコメントし、説明不足を補う。図書館での対応は「情報活用」や「E-Study」と同様だが、調べ学習にあたる時間が3～4時間と限られているため、調べ学習初回にパスファインダーを利用したガイダンスを行い、効率的に学習を進められるようにしている。

英語科では不定期で多読の取組みが行われ、図書館の英語科ライブラリの

資料が利用されている。もともとは司書教諭が図書館にある英語リーダーを整理し、英語科教員へコーナーを紹介したところから始まったのだが、YL(読みやすさレベル)や総単語数を記したシール貼付、読書記録シートのBOX設置などの整備を重ね、今では必要なときすぐに教室貸出や個別に貸出を行うことができるようになった。

また同じく英語科で2006年度と2008年度に日本と世界の災害についてまとめ、英語で発表するという取組みが行われ、図書館は資料を収集するほか、ブックトラックへの資料別置、ブックリスト配布などを行い、短時間での調べ学習に対応した。

2.3 自学自修

本校では、中学で自由研究にあたる「自学自修」に取り組んでいる。1学期にLHRで学年・クラスでの指導が行われ、各人が空き時間や夏休みを利用して調査・研究の成果をまとめ、作品を2学期に提出する。表彰された優秀作品は、翌年の「自学自修」の参考となるように、自由研究に役立つ資料とともに図書館で一定期間展示している。

純粹に自分の興味・関心に応じたテーマを選ぶ生徒が多いため、これらの作品をチェックして蔵書構成を考える際の材料ともしている。近年の優秀作品としては「様々な画家」(作品を実際に色鉛筆で模写し、特徴や感じたことなどを画家の生涯とも照らし合わせながらスケッチブックにまとめる)、「からくりおもちゃ」(制作)などがある。

3 情報リテラシー育成と図書館

生徒の情報リテラシー育成のために、上述の体系的な情報活用教育などは効率のよい方法である。しかし授業や課題だけでなく、生徒の日常のいたるところに学びの芽は存在する。生徒の「知りたい」という気持ちは長続きしない。何か栄養になるものをすぐに得られなければ好奇心の芽がしぼみ、それを繰り返すことで学ぶことに対して消極的になってしまう。生徒にとって一番身近な存在である学校図書館が、資料・情報提供、利用指導などを通して彼らの自由な学びを支援することの意味は大きい。必ずしも図書館が必要

でない場合も多いが、来館した生徒を「手ぶら」で帰さないこと、そのものズバリでなくても何かプラスになる情報を提供するのがレファレンスの本質であり、それも単に与えるのではなく、次に同様の問題が起きたとき自分で解決できるようにサポートすることが重要である。このような知への窓口として学校図書館が機能するためには、次の2つの観点が欠かせない。

3.1 資料・情報へのアクセスを保障する

読書意欲や知的好奇心を刺激する蔵書構成、適切な分類・配列、各種案内表示や見出しなどのサイン設置、インターネットや外部データベース利用などの環境整備がまず挙げられる。

さらに求める資料・情報や問題解決の糸口が自館にない場合でも、外部リソースの活用、相互貸借、所蔵館や類縁機関の紹介など、何らかの手がかりを提示できることが重要である。

3.2 発達段階に応じた指導・支援

授業や課題という必要性が生じたときもそうだが、生徒が自ら知りたいと感じたときこそ情報活用能力を育む大きなチャンスである。

答えをすぐに教えてしまうことは彼らの考える力を奪ってしまう。同様の問題が発生したときに、どうすれば求めるものに辿り着けるのか、少しでも近づけるのか、自ら考え判断できるように指導・支援を行うことが求められる。体系的な情報活用教育の課程を把握し、授業展開とリンクさせると効果的である。また、日常の図書館活動や授業とのかかわりを通して生徒を把握することで、各人の発達段階に応じた効果的な指導・支援が可能となる。

4 授業と図書館活動

今まで授業との関わりを中心に述べてきたが、最後に図書館で授業を行うことが図書館活動全体に及ぼす影響について触れてみたい。情報リテラシー育成以外の観点から見て、授業が図書館で行われることのメリットとしては次のようなものが挙げられる。

- ・ 来館利用の増加→貸出冊数の増加

- ・日常的な図書館利用のない生徒との接点→趣味・嗜好や読書傾向の把握、蔵書構成の見直しなど図書館活動の参考へ
- ・学習情報センターとしての認知→日常的な疑問の解決の場としての利用
- ・予約連絡、督促の機会増

逆に図書館での授業数が多すぎる場合のデメリットとしては次のものが考えられる。

- ・過密スケジュールにより、突発的な調べ学習などに対応できない
- ・「図書館＝授業」との誤った認識の浸透

図書館での授業数が増えてきた場合、本当に図書館の機能を必要とする授業展開なのかという判断を下し、各授業や教員間での調整を行わなければならない。

本校の場合、図書館としての基盤整備をすることが授業への支援につながり、授業への支援を行うことでより充実した図書館サービスの展開が可能になるというよい循環ができ、それは貸出冊数の増加という形でも表れてきた。しかし2003年度をピークに貸出冊数が落ち込み、図書館活動の見直しが迫られることとなった。

業務が肥大化する中でいつの間にか「待ち」の姿勢になっていること、一人ひとりの生徒を把握しきれなくなっていることが大きな原因だが、図書館とは何か原点に立ち戻り、個人の力ではなく図書館という組織として、学校全体を通して、また保護者・OB・地域やさまざまな機関とのネットワークの中で、生徒の学びを育むことが必要である。幸いなことに、2007年度より貸出冊数に回復の兆しが見られるが、生徒個々の読書という体験も大事にしながら、常に生徒の学びのために図書館として何ができるのか、問い続けたいと思う。

貸出冊数減→図書館活動の見直し

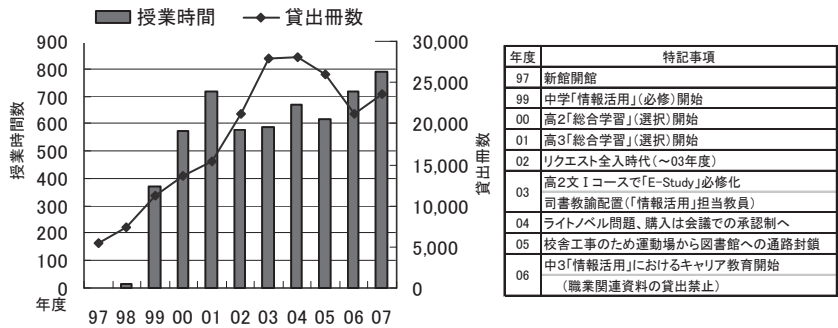


図 貸出冊数と授業時間数の推移

Ⅱ. 情報活用能力の育成とキャリアリサーチ

1 情報活用能力の育成

情報が氾濫し錯綜する今日では、必要な情報を必要な時に的確に得ること、そして自らが考え判断した上で自らも情報の発信者となるといった「情報を扱う力」が非常に重要である。この「情報を扱う力」、すなわち「情報活用能力」は、生徒が将来を生き抜くために不可欠である。本校ではこの能力を育成するとともに、生徒が自ら学ぶ姿勢を身に付けることを目的として、6年間の体系的なカリキュラムを組んでいる。(下図)

中学 「情報活用」	中1 情報収集力・情報整理力の育成 読書習慣の育成	中1・2 基礎期間 人間性を養う 基礎・基本の定着
	中2 論理的な思考力・情報分析力の育成	
	中3（キャリアリサーチ） 総合的な情報活用能力・問題解決力の育成	中3・高1 応用期間
高1 教科「情報」	高1 情報モラル・情報スキルの習得	視野を広げる 学習への動機づけ 目的意識の育成
高2文Ⅰ・Ⅱ 「E-Study」	高2・3 テーマに対する探究活動 プレゼンテーション能力・情報発信技術の習得	高2・3 発展期間 興味関心を深め より専門的に
高3選択 「E-Study」		

図 甲南における教育システムと情報活用能力育成のカリキュラム

中学で行っている「情報活用」は、従来の図書館利用教育を発展的に継承し、調べ学習や問題解決型の学習に対応できる情報処理能力を身につけさせる「学び方を学ぶ」授業である。1・2年は週2時間、中3では週1時間を教科の枠から外れた独自のカリキュラムで展開している⁽¹⁾。中3は半数分割で書道と裏表の時間割を組むことにより、より少人数での学習を可能とした。また、学習テーマにキャリア教育⁽²⁾を導入することにより、自発的な「学び」が、視野を広げ、自己の可能性を探る一歩であることを学ぶ機会となっている。

高校では1年で教科「情報」を履修し、そこでコンピュータテクノロジーと現代社会の関わりを学び、情報スキルの習得に軸を置いた学習をしている。高二・高三はそれぞれの目標に向かって歩み始める段階で、各々が自身の探究テーマを持ち、その探究の過程で現場（フィールド）に赴くことを必須項目にした「E-Study」という授業を受けている。E-Studyではフィールドワークによって得た知識や経験を踏まえて、レポートやプレゼンテーションといっ

た発表を行う学習を展開している⁽³⁾。

今回の発表では中3で行っている「キャリアリサーチ」を中心に、情報活用能力の育成を行う上での課題と今後の展望について述べていきたい。

2 「情報活用」の授業の展開

下表は「情報活用」の3年間のシラバスである⁽⁴⁾。

「情報活用」のシラバス

学年	1 年	2 年	3 年
目標	情報収集力・情報整理力の育成、読書習慣の育成	論理的な思考力、情報分析力の育成	総合的な情報活用能力、問題解決力の育成
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館の利用の仕方 ・国語辞典の使い方 ・英語辞典・漢和辞典の使い方 ・図鑑の使い方 ・原稿用紙の使い方、文章のまとめ方 ・表のまとめ方 ・伝記を読む ・日本十進分類法、図書館での本の探し方 ・情報モラル 	ディベート <ul style="list-style-type: none"> ・事実と意見 ・三角ロジック ・ディベートのルールと方法 ・メモの取り方 ・クラスで論題を決めてマイクロディベートでの演習 	キャリア教育 <ul style="list-style-type: none"> ・職業の選択 ・情報収集、情報カードの書き方 ・インタビューの仕方、メモの取り方 ・ポスターの書き方 ・発表原稿の作り方、原稿用紙の使い方 ・発表
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・メディアの特性 ・地名事典・人名事典の使い方 ・百科事典の使い方 ・統計情報を読む、グラフの作り方 ・調べ方のポイント ・ポスターの作り方 ・意見文の書き方 ・インターネットの利用 ・本を読み、本の帯を作る。 ・「生きる」をテーマに読書感想文を書く 	新聞の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・新聞の読み方 ・テーマの設定 ・情報の集め方、まとめ方 ・新聞の作り方（情報の発信） ・著作権 ・インターネットの利用 ・情報モラル 	キャリア教育 <ul style="list-style-type: none"> ・職業の選択 ・情報収集、情報カードの書き方 ・コンピュータでの発表の仕方（PowerPoint の活用） ・発表原稿の作り方 ・発表

3 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の読み取り方、まとめ方 ・新聞を読む（お誕生日新聞を使って） ・新聞記事を使ったファイル資料の作成（ことば調べ、キーワード、参考資料、テーマのまとめ） 	ディベート <ul style="list-style-type: none"> ・情報の集め方、まとめ方 ・プレゼンテーション資料の作り方 ・グループでのディベート対戦 	キャリア教育 <ul style="list-style-type: none"> ・職業の選択 ・情報収集、情報カードの書き方 ・レポートのまとめ方
-------------	--	--	--

1 年は、情報を「集める」「整理する」「まとめる」を基本とし、何度も繰り返し学習することで情報に関する基本的な考え方を身に付ける。2 年は主張の裏づけとして得た情報を取捨選択し、加工することを学ぶ。3 年はこれまで学習したことを踏まえた上で、自ら課題を見つけ整理し、作業の進捗を自分で管理し、最終的に自分の学習したことを総合的にまとめていくという作業をすることで、総合的な情報活用能力の育成を図っている。

評価については、1・2 年は100点満点で、3 年はA～Dの4段階で行っている。テストは行わず、提出物・作品・発表等で採点している。評価のポイントとしては

1. 期限を守り、提出すること
2. 自分なりの工夫が見られること
3. 自ら課題を設定し、その解決に向けて努力する、進捗を管理し積極的に作業すること

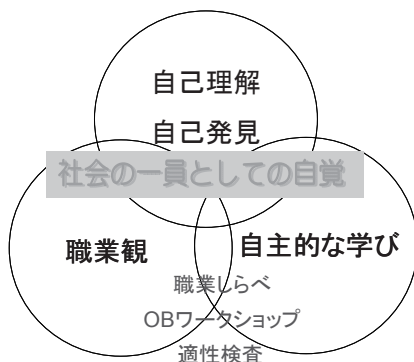
で、客観的な観点で6割、主観的な観点で4割となるよう採点している。

3 キャリアリサーチの効果

2006年度から本校で導入された中高一貫の教育システムとは、「2（基本期間）・2（応用期間）・2（発展機関）」⁽⁵⁾の2年ごとに細かな教育目標を掲げ、その目標に沿ったものであるが、キャリアリサーチはこの「応用期間」の教育目標を達成するプログラムの1つである。

このキャリアリサーチを実施するにあたっては、以下のような目標をあげている。

1. 自分の興味・関心を知り、将来に向けての適性を考える
(自己理解・自己発見)
2. 社会にある様々な職業を知り、「働く」ことの意義を知る
(職業観の育成)
3. 自ら課題を設定し、課題解決の方法を考え解決に向けた行動をする
(自主的な学び)



これらの展開は、「情報活用」の中で職業調べをすることや、土曜日にOBを招いてワークショップを行うこと、HRの中で進路適性検査を行うことを相互に絡めながら実施している。将来、社会に出て行く彼らが、主体的に自分の進路を決め、そのために何が必要かを考えることで、高校生活・大学生活を充実したものにしてもらえるように、と考えたプログラムである。

OBワークショップでは弁護士や教師、医師、広告代理店・建築会社・ホテル・銀行など様々な業界で活躍されている方を毎回10～13名程度迎え、それぞれのワークショップで仕事についてだけでなく、生き方や学生時代の話など、多方面にわたる話を聞くことで、職業についての理解を深めるだけでなく、生き方・考え方のいい刺激となっている。

OBワークショップと並行して「情報活用」の授業では、OBワークショップに向けた準備なども行っているが、授業自体は独立しており、以下のような流れで作業を進めている。

1 学期（職業しらべ～ポスターセッション）

調べた職業の明と暗を比較し、自分の意見を発表する

2 学期（職業しらべ～PowerPointを使つての発表）

調べた職業の人との関わりから働く上で大切なことを考え、発表する

3 学期（レポート作成）

1年間で学んだことから、「問い」を見つけ答えを考える

最終的にまとめる3学期のレポートでは、課題の例として「働く理由」「社

会にひろく貢献する仕事」「なぜ部下の失敗で上司が怒られるのか」「非正社員が多くなっているのは何故か」といった、各人が調べたり、OB の話を聞いたりした中から「問い」を考え、自分なりの意見を導き出すという作業を通して、「働く」ことの意味を考えている。

このように「キャリアリサーチ」は単に調べてまとめるという作業ではなく、様々な情報を得て複合的・総合的に考えることで、社会の一員としての自分を見つめなおすいい機会になっている。

4 「主体的な学び」を推進するために～今後の課題～

「情報活用」は「学び方を学ぶ」授業である。生徒たちが課題にぶつかったり、課題に向き合ったときに自分で解決方法を考え自主的に作業ができるように、様々な方法を学習できるようなカリキュラムを組んでいる。しかしながら、単に「学び方」を学ぶだけでは授業として成立せず、与えられた課題をこなすだけでは結果的に主体的な学習に結びつくとはいえない。

そういった点で、キャリアリサーチを「情報活用」のカリキュラムの中に取り込むことは彼らに「学ぶ」動機を与えることになり、OB と連携することで外部からの刺激も受け、単なる「学び方」を学ぶ授業から脱却するいい転機となったように感じている。

本校では高校でも「E-Study」（総合的な学習の時間に相当）という授業があり、一人ひとり違ったテーマで、それぞれの課題に向けて情報収集やフィールドワークを行っている。この授業では生徒一人ひとりが積極的に活動することを前提としているが、課題にむき合う個々のモチベーションにはかなりの差があり、結果的に成果にも大きく影響している。授業の成果を AO 入試などの大学入試に活かしていこうとする生徒は、非常に精力的に活動するが、一方で漠然とやらされている感が強い生徒はただ、言われたことをこなしているだけで、その差は歴然としている。後者がもっと能動的に学習を展開するためには、受験を含めて何らかの動機付けが必要だとひしひしと感じている。

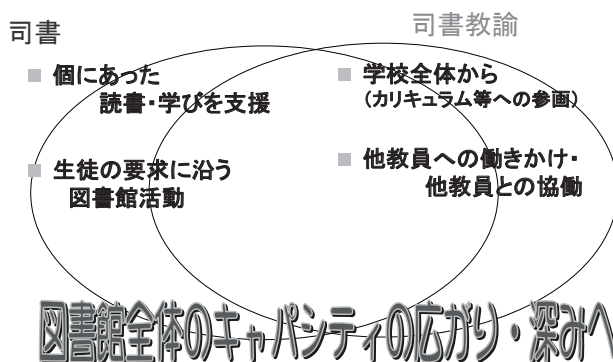
今後は、学校の中で生徒個人の興味や関心から課題を見つけるということではなく、企画提案型の学習へ展開する、高大連携や産学連携を推進するな

ど、より社会と密接につながる学習へと転換をするなどの工夫をしていきたい。本校はOBの多くに企業のトップを持っている。これを活かして、例えばOBの会社の新製品のコンペをするなどといった、成果を目に見えるものにしていくができないか考えている。当然のことながらこちらが一方的に協力を仰ぐのではなく、協力いただいたOBにも何か還元されるような仕組みにならないかということも含めて検討したい。

これらの展開に当たり、従来の図書館が行ってきた情報提供・資料提供から一步進めて、図書館の中に企業のプレゼンコーナーを設けるなど生徒たちの関心をひく工夫などを模索していくことも必要だろう。

Ⅲ. 最後に～司書と司書教諭が共に専門職として協働する学校図書館～

本校においては司書3人と司書教諭である私とそして一般の教諭の中から選ばれた館長の5名が図書館スタッフとして学校図書館で働いている。司書と司書教諭がどのように協働しているかということについて、最後に説明したい。



司書の領域としては図書館の管理・運営がその職務の大半を占める。図書館の日常的な業務のほとんどは司書が行っている。それに対して、司書教諭は「情報活用」という授業を通して情報活用能力の育成を体系的に実施する

というのが主な仕事である⁽⁶⁾。司書が個々の読書・学びをサポートし、生徒の興味・関心・要求に沿う図書館を築き上げていくのに対し、司書教諭は学校全体の教育の中から図書館が関わる部分を探し出し、そして結び付けていくのがその役割にあたる。それぞれが違う役割は持っているといっても、図書館活動全体から見ると、それぞれの領域の大部分は重なり合っている。つまり、それぞれの領域で多少方向性に差があるとはいえ、基本的な部分はどちらがやってもいいというのが、本校の司書と司書教諭の協働であり、司書と司書教諭の専門性に差がない、というのが私の実感である。両者の仕事はぶつかり合って邪魔するものではなく、個々の能力に応じて各々が最大限の力を発揮できるように努めることが肝要である。このことが、図書館の可能性を広げ、学校図書館が学校教育の中で多方面に貢献できるきっかけとなっている。

教育職・事務職でそれぞれ人事や組織が異なり、制度的に両者が介入することを嫌う側面がないとはいえない以上、それぞれの領域・得意分野で仕事を分担することは必然となる。学校図書館の運営にはさまざまな人の協力が欠かせず、一方だけの視野で語ることはできない。図書館が精力的に活動するためには、司書・司書教諭がそれぞれのキャパシティを広げ、かつ深めていくことが大切だと痛感している。その前提として両者が「学校図書館とは生徒の学びを育む場であり、生徒の可能性を広げる場」という共通認識を持っていること、それぞれが高い理想と信念を持っていること、が必要なのだと思う。

注

- (1) 「総合的な学習の時間」に相当。評価の対象となっている。
- (2) 本校で実施するキャリア教育を独自に「キャリアリサーチ」と呼ぶ。
- (3) 高2の文Ⅱコースでは外部受験を視野に、フィールドワークは行わずに論文作成に重点を置いている。
- (4) 「2009年度甲南中学校シラバス」(教務部)より、担当、評価の基準、教材を省略。
- (5) 前述の図を参照。

- (6) 司書教諭は、授業の持ち時間としての軽減がなく、現在、週15時間を受け持つ。昨年は担任をしたが、その年は実質的に図書館業務を担当することは無理だった（司書との連絡さえおぼつかないことも頻繁にあった）。

（さとう けいこ。甲南高等学校・中学校司書）
（なかつい ひろこ。甲南高等学校・中学校司書教諭）